

序にかえて

和歌山大学教育学部附属小学校長 矢萩喜孝

平成10年12月、当時の文部省より「新学習指導要領」が示されて以来、子どもたち一人ひとりの〈生きる力〉を目標に掲げながら、「学校完全5日制」の実施や、「ゆとりある教育活動」の推進、あるいは「総合的な学習の時間」の実現などが図られ、これまでも全国的規模でさまざまな展開がなされてきました。その一方で、基礎学力の充実といった観点からも、さまざまな提言がなされ、この度はそれらを受けるかたちで、学習指導要領が一部改訂されました。

いずれにせよわたしにとっては、今日の一連の教育改革は、戦後教育のありかたの重要な結節点と捉えるべきである、と思う一方で、来るべき“未来の教育”への、確かなプロローグであって欲しいと願わずにはられません。

ところで、(わたしが若い頃に習い覚えた)カントの言葉に、

「人間とは教育されなくてはならない、ただ一つの被造物である」

というのがあります。

この意味するところは、愚考するに——子どもたちが放埒で勝手気儘な日々を過ごすことなく、「本当の人間」としてかれらが成長するためにも、大人は常にしっかりとした教育を授けなくてはいけない、ということではないでしょうか。

人間が人間として生きていくかぎり、「教育」そのものが、わたしたちにとって間絶することなく永遠に続く社会的営みであるということを改めて認識させられ、そのことを思えば思うほど、この偉大なる哲学者の言葉は今日、少しも色褪せることなくわたしたちの心に、強く迫ってくるのです。

ともあれ、この世にあって〈未来からの留学生〉でもある子どもたちが、真の意味での“学ぶよろこび”を享受しながら、未来に向かって「生きる力」を発揮するためにはどのような教育がのぞましいのか、そして、その理想とする方法論とは何か、ということについて、わが附属小の教員は、これまでも真剣に討論を重ねてきました。

本校では数年来、「わたしが生きるわたしの学習」という教育の目標を基本に掲げ、特に本年は【学習文化の創造 —— 教科・「みらい」の学習を通して】をテーマに、教科学習の研究、および本校独自の総合的な学習である「みらい」の学習の研究を、併せておこなっております。

わたしをはじめ教員一同は、あくまでも〈まなびの主人公は子ども〉であることを常に自覚しながら、これからも日々、研鑽に励んでいくつもりであります。

みなさまには今後とも、忌憚なきご指導ご鞭撻をいただければ幸いです。